RID2600 2023～2024 第37年度伊那中央ロータリークラブ週報

INACHUO ROTARY WEEKLY NEWS

事務所：長野県伊那市西町 5016-2　電話 0265(76)5858　例会日：毎週火曜日　例会場：海老屋料理店 0265(72)2158
会 長：市川修次　副会長：唐澤　稔　幹事：宮下　健　公共イメージ向上委員長：加藤　篤

世界に希望を生み出そう

2023-2024 国際ロータリーのテーマ

世界に希望を生み出そう

2023-2024 RI会長
ゴードン R.
マッキナリー
＜スコットランド、
ウェストロージアン＞

第1686回例会　令和6年1月23日（火）

■ 点　鐘　12：30

■ ソング　それでこそロータリー　　鈴木一比古ソングリーダー

■ ゲスト・ビジター紹介

・青木法律事務所　弁護士 青木謙一　様

■ 会長挨拶　市川修次会長

先週の木曜日に甲府の裁判所で、犯行当時 19 歳であった被告に死刑判決が言い渡されるという裁判がありました。夫婦を殺害し放火したというもので、私どもの支店も甲府にある事から感心の深い事件でしたが、この判決もあった事から、ある死刑囚の話をさせて頂きます。

松本に窪田空穂という国文学者の記念館があります。この窪田空穂という人は短歌を詠む歌人で毎日歌壇の選者であった人ですが、この人の記念館の中に「島秋人」という人のコーナーがあります。この「島秋人」という名前はペンネームで、「秋」は「春夏秋冬」の「秋」に「人」と言う字で「しゅうじん」と読める訳ですが、この人は強盗殺人事件を起こして絞首刑になった人です。本名は「中村覚」といって、北朝鮮で生まれて戦後日本に引き上げて来たのですが、父親が満州で警察官であった事から、占領政策に携わった人は公職から追放されるという「公職追放政策」の為に仕事が無く貧しい家庭となり、母親を早い内に栄養失調で亡くすという環境に育ったそうです。本人も病弱で成績も最下位という事で、中学卒業後、強盗事件や放火事件などを繰り返し 25 歳の時に、夫婦と子供 2 人の 4 人家族の家に押し入り現金を奪って母親を殺してしまうという事件を起こしました。凶悪事件を繰り返したという事で死刑判決を受け死刑になるまでの 7 年間 33 歳で絞首刑になっていますが、それまで短歌を詠み毎日歌壇に投稿し続けたという事です。短歌を作り始めたキッカケは、小学生時代に一人だけ自分の絵をほめてくれた先生に手紙を書いたところ、その先生は奥さんの詠んだ短歌を添えて返事を送ったそうです。毎日歌壇で入選を繰り返すようになり毎日歌壇賞も受賞し、その選者が窪田空穂であった事からこの窪田空穂記念館にこの人のコーナーがあるという訳です。

この島秋人が死刑になった後に詠んだ短歌を集めた本が「遺愛集」として出版されております。この本を読みますと、自分が殺してしまった母親の残された子供達を、自分の手で同じ境遇にしてしまった事を悔いる句から心が徐々に澄んでいく様子がよく判るような気がします。短歌を詠み始めてキリスト教の洗礼も受けていますが、小さい頃にもう少し環境が違ったならこの才能が見いだされていただろうなと思います。前日まで短歌を詠んでいますがその時詠んだ短歌の一首です。

・「土ちかき部屋に移され処刑待つ、ひとときの温かきいのち愛しむ」

■ ニコニコボックス

◆市川修次　一週間程前からの風邪がなかなか治らず長引いています。今年の風邪には気を付けた方が良いと思います。
今日は青木謙一様、卓話を宜しくお願い致します。

◆宮下健　青木様、本日のクラブフォーラムよろしくお願いします。駒ヶ根が拠点のようですが、是非とも当クラブへ入会して頂けると嬉しいです。太田弁護士だけでは不安なので･･･

◆松田靖宏　青木様、本日の卓話よろしくお願いいたします。

◆太田明良　本日、職業・社会奉仕のクラブフォーラムで青木謙一さんに卓話をお願いしています。社会問題をビジネス化するという、現在私が伊那まちBASEでやっている活動にとっても役に立つ話が聞けるので、私自身も楽しみです。

◆池田幸平
馬場秀則　皆様、今年一年よろしくお願い致します。昨日、第2回の会員増強委員会の勉強会と歓迎会を行いました。今年も皆様、会員増強にご協力ください。
馬場副委員長に素晴らしい講話をいただきました。

◆井上修　何もいいことありませんが、唐澤さんが可愛いので大口でなく小口を出します。澁谷君はかわいくない？！

■ 幹事報告　宮下健幹事

幹事報告は別紙をご覧ください。

■ 委員会報告

・1月20日（土）「会員増強委員会・出席委員会」の合同歓迎会・勉強会の報告

池上幸平会員増強・プログラム委員長

令和６年１月 20 日午後６時 30 分～北野屋さんで開催しました。参加員数は 16 名です。

新入会員は、平澤照雄さん・唐澤知子さん・伊藤歩美さんの ３ 名であります。紹介が終わり､馬場秀則副委員長に「ロータリークラブについて」の講演をお願いしました。

１．奉仕をしましょう。
２．例会に参加しましょう。
３．何事も断らないようにしましょう。

のルールの説明がありまして勉強会は終了しました。その後チャーターメンバーの矢島会員の「ロータリーを通じて皆さんで思い切り楽しみましょう」の乾杯の下、歓迎会が始まりました。

■ 出席報告

会員数47名　出席免除会員5名　長欠会員1名　本日出席者26名　事前メイク1名
出席率65.85％　前回出席率 修正なし

■ クラブフォーラム　「職業・社会奉仕委員会」

・委員長挨拶　太田明良職業・社会奉仕委員長

本日卓話をしてくれる青木謙一氏をご紹介します。

彼は駒ヶ根市で弁護士をしており、弁護士会では過去に副会長や現在刑事弁護委員の委員長をやるなど要職を歴任している将来有望の人材として活躍しております。

本日は、弁護士としての立場でのお話ではなく、昨年度青年会議所（ＪＣ）の理事長時に方針として打ち出した、社会問題をビジネス化するというソーシャルアントレプレナーとは何かということをお話してもらいます。

私自身も現在「伊那まちベース」という子供を中心とした多世代をつなぐ拠点をつくり地域で問題を解決できるサイクルをつくるというある意味、少子化対策や地方の人口減対策という社会問題につながることに取り組んでいますが、本年度で補助金が切れるので自走できるだけの収入が得られるのかということが喫緊の問題となっています。

次頁へ続く

なぜ、いいことをしているつもりなのに、お金で困るのかということを彼と話しているときにこのソーシャルアントレプレナーの話をお聞きして、社会問題をビジネス化して循環させていくことは社会奉仕という観点でもとてもいい話だと思い、これは皆さまに是非聞いていただきたいと考えて本日卓話をお願いした次第です。

・卓話　　青木法律事務所　弁護士 青木謙一様

みなさんこんにちは。私は弁護士の青木謙一と申します。昨年度の駒ヶ根青年会議所の理事長としておこなった活動の関係でお話させていただきます。理事長になると基本方針というものを作ることになり、私は昨年、組織の理念共感に関する委員会、主権者意識向上委員会、ソーシャルアントレプレナー委員会という3つを作りました。本日は、そのなかのソーシャルアントレプレナーというテーマで話をさせていただきます。

さて、皆さまは一体何のために働いているでしょうか。

日々忙しく働いているけれど、自分の仕事は本当に社会を良くしているのだろうか、多くの人々がそんなモヤモヤを胸のどこかに抱えながら日々仕事を頑張っているのではないでしょうか。私の仕事は社会をよくしている、と胸を張って言える人の方が珍しいと思います。

一方で、世の中には様々な社会問題が存在しています。貧困問題、地球温暖化問題、人種差別、性差別、難民問題等、皆さんも日々何かしらの社会問題を目にしたり耳にしたりしているはずです。

しかしそんな社会問題が起こっていることを知ったとき、こんな思いをしたことが無いでしょうか？何とかしたいけど、自分にはどうすることもできない…非営利組織に転職したり、ボランティアとして関われば貢献できるかもしれない。でも、定年後ならまだしも、今は生活が最優先、家族がいるから稼ぎも必要、今の会社を辞めるわけにはいかない。そもそも自分一人がどうにかしようと思ったところでどうにもならない、あまりにも無力すぎる。そんな無力感を感じていると、すぐに日常のあれやこれやが押し寄せてきて、結局何も変わらないまま、ただいつもの忙しい日々が過ぎていく。でもモヤモヤだけがずっと心のどこかに残ってしまっている。そんな経験をされていないでしょうか。おそらく、今回私がここにきたきっかけは、太田職業奉仕委員長がもやもやしているところに私がソーシャルビジネスの話をしたことがきっかけだと思います。

それでは本日の本題に入ります。

まずはソーシャルビジネスの定義から説明していきたいと思います。

あらゆるビジネスは社会の何らかの課題を解決するためにあります。すべての商品やサービスは人々が感じる不満や不便などを解消していてどの会社も社会に必要とされているから存在しているのです。では社会の「不」を解消するビジネスであればソーシャルビジネスかと言えば必ずしもそうではありません。従来のビジネスが対象とする「不」は基本的にマーケットニーズがあるものです。その不満や不便を解消してくれることに対して十分なお金を払える人たちを対象としています。そうしたお金を払う準備のある「不」を解消するビジネスはある程度儲かるのでいずれ誰かがやってくれます。

一方、ソーシャルビジネスが取り扱うのは、儲からないとマーケットから放置されている社会問題です。例えば貧困、難民、過疎化、食品廃棄、これらは見過ごすことのできない重大な問題ですが、簡単に儲かる分野ではないので誰も手を出そうとしません。こうしたマーケットから取り残されている社会問題にビジネスとして取り組むのがソーシャルビジネスなのです。

そしてソーシャルビジネスが挑戦するのは「非効率をも含めて経済が成り立つようにビジネスをリデザインする」ことです。例えば、従来のビジネスでは身体の不自由な人や高齢者はなかなか雇いません。仮に雇用したとしても給料は低くなっています。できる作業が限られていることや、作業のスピードが遅いからです。そこでソーシャルビジネスが挑戦するのは、そういった方が無理のないスピードで作業しても、十分な給料を払えるようにビジネスをデザインすることです。そのためには、そのコストを賄うだけの高い価格でも買ってもらえる付加価値の高い商品を開発する必要があります。これは簡単なことではありませんが、最初からそれを前提にビジネスを設計しておけば実現可能なのです。

社会活動を事業として成立させることができれば、公的支援に頼らず、経済的に自走できるようになります。事業が成長すれば、たくさんの雇用を生み出し、その課題解決に従事する人も増えます。事業として取り組むことでより早く、さらに大きなインパクトを生み出すこともできるようになります。このことから社会課題の持続的解決のためにはビジネスの力が不可欠であるということがわかります。

ビジネスとして取り組むべき理由をもう一つ加えるとすれば、生活者が消費活動を通して社会問題の解決に貢献できるようになるということです。ＮＰＯへ寄付する形での社会貢献もあれば、たとえば障がいのある人が作った製品を買うことでも障がい者の雇用づくりに貢献することができます。生活者にこうした選択

次頁へ続く

肢をたくさん提供することも、ビジネスだからこそできるとても大切な役割だと思っています。

非効率を含んだビジネスでありながら、これ最高だよねと生活者が買い続けたくなる商品やサービスをいかに提供していくのか、これこそがソーシャルビジネスに挑戦するビジネスパーソンの腕の見せ所でもあります。本日ここにおられる一流のビジネスパーソンの皆さまこそ、社会問題をビジネスで解決することに挑戦していただきたいということになります。

こうしたソーシャルビジネスを立ち上げ、実践する人のことをソーシャルアントレプレナー、すなわち「社会起業家」と呼んでいます。もともと「経済」という言葉は「経世済民」を語源としていて、「世の中をよく治めて人々を苦しみから救うこと」という意味があるようです。それならば、わざわざ「社会起業家」と区別しなくてもよさそうですが、一般的なビジネスとソーシャルビジネスはスタート地点が少し違います。一般的なビジネスは「マーケットニーズは何か、これから大きく成長する市場はどこか」をさがして事業領域を決めていきます。つまりマーケットニーズが起点です。それに対して社会起業家は「マーケットニーズがあるからここでやる、ないからやらない」ではなく、解決すべき社会問題があるところで起業します。そのうえで利益が出るように工夫していく。彼らがつくっているのは、社会ソリューションであって、あくまでも「ビジネス」は手段にすぎません。

勘違いしないでおきたいのは「社会起業だから儲けなくてもいい」と言っているわけではないことです。持続的に活動を行うために、そしてより大きな社会的インパクトを出すためにはしっかり経営していく必要があります。本当に困っている人の生活や環境を変えようとする社会起業は「儲からないから続けられませんでした」なんてことは許されません。利益が出る仕組みをつくることは、社会起業家にとってのいわば「けじめ」と言えるでしょう。

ここまで社会起業家の話をしてきましたが、必ずしも起業家になれと言っているわけではありません。起業したり何かを自分で一から作ったりするのはハードルが高いと感じる人は「ちゃんとした消費者になる」ところから始めてみましょう。なぜなら消費者のパワーはものすごく大きいからです。ソーシャルビジネスの役割は、より良い社会をつくるための新たな選択肢を消費者に提示することですが、一方で、その新たな選択肢を受け取る消費者がいなければ成立しません。つまり、提示する人も大切だけど、受け取る人も大切。その両方の存在があってはじめて社会は良くなっていくのです。そのためには、まず一人ひとりがちゃんとした消費者になることが重要だと思います。より良い社会をつくるために「正しい選択をしながら生活していく」ということです。例えば、フェアトレードのものを買ったり使ったりする、エシカル消費を意識するということがあげられると思います。

いろいろ申し上げましたが、社会起業家が目指そうとしているものは、誰も取り残されない社会です。それを目指すことは容易ではありません。

ここで、実際にそのような活動をしている団体としてボーダレスジャパンという団体をご紹介したいと思います。

私が理事長時に駒ヶ根にボーダレスジャパンの副社長の鈴木さんをお招きしてお話をしてもらい、ボーダレスジャパン取り組みとしてふるさと納税に、地域で活動している良い取り組みをしている団体への寄付を組み込むという構想があるのを聞き、駒ヶ根青年会議所としては下伊那の市町村にこの構想をプレゼンすることをしました。この取り組みは実際に神戸市等実現している自治体もあります。皆さんも本日の私の話を聞くことでご興味がわきましたら、ぜひボーダレスジャパンを調べてみてください。

本日の私の話が、皆様のこれからの事業や活動に多少なりとも寄与することができれば幸いです。

ご清聴ありがとうございました。

■点　鐘　　13：30

次回例会
1 月 30 日（火）　点鐘／ 12:30　　場所／海老屋料理店
・全員協議会「次年度地区補助金事業について」「I.M. について」
・例会終了後：クラブ協議会（下期はじめ）・理事会